CARE World

生きるチカラを信じて支える

Vol. 26 ケア・インターナショナル ジャパン Newsletter March 2014

国際協力NGO「CARE」は、1945年から100カ国以上で人道支援活動を実施してきた世界最大級の国際協力NGOです。日本事務局である当財団では、主にアジアやアフリカにおいて、災害時の人道支援を行うとともに、「女性や子ども」に焦点をあてた活動を通して、最も困難な状況にある人々の自立を支援しています。

Contents

page 1 国際女性の日 /Walk in Her Shoes 2014
page 2 東ティモール事業
page 3 フィリピン台風被災者支援
page 4-5 東日本大震災３周年
page 6 ファンドレイジング・ボランティア
page 7 スタッフ紹介 / 私スタイルの CARE ライフ
page 8 事務局報告・CARE ストーリー

「国際女性の日」

1975年の国際婦人年に国連は3月8日を「国際女性の日」と定めました。その起源は1900年代初めの女性参政権の運動にあります。それから100年が過ぎ、女性を取り巻く環境は大きく変わってきました。しかし、世界にはまだまだ女性の社会・経済進出において、課題があります。途上国や紛争国での災害時におけるレイプや暴力、小学校に行かせてもらえない女の子たち、水汲みや薪運びに一日の多くの時間を費やす女性や女の子のたち…。ジェンダー（注）の平等と女性のエンパワメントを推進するCAREは、世界80ヶ国以上の事務所が一丸となって、この国際女性の日に向けて啓発活動を行っています。

途上国の現場では、CAREの活動を通じて、確実に、女性たちの置かれた状況が変化しています。女性の経済進出と乳幼児の栄養改善を目指して、西アフリカのガーナで実施しているソーシャルビジネス事業での事例をご紹介したいと思います。貧しい村で暮らす彼女たちは、元々CAREの支援で小規模ビジネス（小売り）を始めた女性たちです。栄養改善につながる食品添加物を新たに商品に加えると同時に、村々で栄養啓発も積極的に行っています。

サナトゥ・サーカさん（41歳）
儲けで山羊を買うことができました。山羊のミルクはとても栄養があります。また、タバコも販売していますが、タバコを買いに来た男性が子どもたちのために食品添加物も買って行くようになり、男性たちにも栄養啓発の効果が現れています。

マリアマ・トーマスさん（50歳）
ガーナでは、小学校までは無償教育ですが、中学からは有料となり、貧困層には厳しい現状です。でもCAREの支援により商売を始めることができ、娘を中学校に通わせることができました。

（注）ジェンダーとは、生物学的性別に対して、社会や文化的に形成されてきた性別（田中由美子「ジェンダーと開発」）。
ジェンダーの定義は概ね４つの側面から捉えられる。1）「社会的・文化的に創られた性・性別・性役割」であることの含意における「構築性」、2）性のダブルスタンダードなど性の「非対称性」の側面、3）優位・劣位関係を組み込んだ性別秩序の「階層性」の側面、4）人種、民族、宗教、年齢など「他の階層問題とジェンダーとの重層性」の側面にわたるもの（竹村和子「ジェンダー」、『岩波　女性学事典』）。

（常務理事・事務局長 武田　勝彦）

3月8日に歩く国際協力「Walk in Her Shoes 2014」スタート！

本年も国際女性の日を皮切りに、歩く国際協力「Walk in Her Shoes 2014」がスタートします。安全な水にアクセスできない人々は世界で7億6,800万人。日本の人口の約6倍といわれています。　私たちにとってあたり前のようにある水資源に感謝し歩くことで、途上国の人々の命や生活を支えよう！と始まったこのキャンペーンは、今年で3年目を迎えます。2014年は、モデルの加覧愛さんとウォーキングトレーナーの福村あけみさんをアンバサダーとして迎え、3月8日にチャリティーウォークを開催。5月には東京と大阪でのイベント開催も予定しています。また、今年は参加者全員で「5,000万歩」の歩数目標を掲げ、日本全国でその共感の輪を広げていきたいと思っております。皆さまのご参加をお待ちしております。

加覧愛さん

福村あけみさん
Photo: Seiji Matsunoshita

終了事業

つながる国際協力「CAREスマイルギフトキャンペーン2013」終了報告

２年目を迎えた本キャンペーンは、2013年度も多くの法人・個人の皆さまからご支援をいただき、無事終了いたしました。当財団は、アジアで一番新しい国「東ティモール」の人びとを応援するとともに、日本の支援者が東ティモールの人びととのつながりを感じ、真の意味で「ともに」社会課題の解決に取り組む社会をつくりたいという想いで本キャンペーンを続けています。

１年目は、登校用のカバンと文具のセットを就学期の子どもたちに贈りましたが、今年度は情報へのアクセスが限られた農村部の人びとに「生きるための情報」を届けるべく、CARE東ティモールが2010年から編集・出版している現地語テトゥン語による教育雑誌「ラファエック（ワニという意味）」の製作と22,000世帯への配布を支援しました。

「ラファエック」から人びとが得た知識は「生きるチカラ」として蓄積され、子どもや家族、コミュニティの人びとなど、世代や場所を超えて拡がる、持続可能な形の支援へとつながっています。CAREはこれからもより多くの人々に「ラファエック」をお届けできるよう活動して参りますので、引き続き皆さまのご支援をよろしくお願いいたします。

現地レポート「ラファエック」の読者に会ってきました

植民地支配、内戦、独立戦争、数々の苦難を経験してきた東ティモール。しかし2002年自らの手で「独立」を勝ち取ったこの国の人たちの目は輝き、町は活気で溢れていました。

東ティモールでは教科書は先生のみが所持し、子どもたちは教科書や教材がないという状況の中、1日目に訪れた学校では、ラファエックが数少ない教材として活用されていました。ラファエックの内容は算数、理科、国語（テトゥン語、ポルトガル語）、道徳、環境、健康、衛生等幅広く、家庭においては、生活の手引きとしても活用されています。

訪問2日目には、エルメラ県アツァベ地区マラベ村を訪れました。そこでは、ラファエックを活用しながら、村民を対象とした談話ワークショップが行われ、村全体の半分以上の老若男女70名程が参加。「ラファエック」の内容に関するクイズ、有機殺虫剤の実演、住民とCAREスタッフ間の質疑応答、次回のラファエックの内容等についての意見交換が行われました。参加者の一人の大学生のティノさんは5時間かけて首都ディリからバイクに乗ってこのワークショップのために帰郷していました。字の読めない両親に有機殺虫剤の作り方を教えたいからだといいます。その横では小学生の女の子がラファエックを大事そうに抱きしめていました。

（事業部　緊急支援コーディネーター　玉熊　諭）

独立から12年。未だに教科書はもとよりテトゥン語の出版物がほとんどありません

ラファエックを大事そうに抱える女の子

片道5時間かけてバイクで駆けつけてくれた大学生のティノさんにインタビューする玉熊職員

新規事業

フィリピン台風被災者緊急支援事業 発生から４カ月

フィリピンに甚大な被害をもたらした台風30号の発生から3月8日で4カ月を迎えます。

CAREは、発生直後から最も被害の大きかったレイテ島、バナイ島、そしてサマール島で活動を続けています。

2014年1月31日現在で、皆さまより、合計305件（総額11,076,062円）のご支援をいただきました。この場をお借りして、皆さまからのご支援に対し心より感謝申し上げます。皆さまから寄せられた善意は、例えば、崩壊した家屋を再建する資材に替えて、被災者のもとに届けられています。

CAREは、これまでの海外における緊急支援と同様に、支援が行き届いていない地域を選定し、被災者の緊急ニーズ（食糧や飲料水の配布、避難所の提供、衛生環境の整備）に対応してきました。具体的には1月31日現在、88,630人以上に食糧を、15,835人以上に避難住宅用の資材を配布しました。

今後は、いまだ食糧と住宅資材のニーズが高いことも踏まえ、物資の配布を引き続き行う一方で、流通の回復を見つつ被災者への現金支給支援に移行する予定です。また、被災者の多くが生活手段を失ったことをうけ、現在地元の自治体とともに、人々が早急に仕事に戻り収入が得られるよう支援する「Cash for Workプログラム」を策定中です。

引き続き、皆さまのご支援をよろしくお願いいたします。

発生直後、電気や通信インフラが絶たれた中、現地入りしたスタッフは衛星電話で連絡をとっていました

CAREは、フィリピンが自然災害を受けやすい国であることを踏まえ、台風の被害から守る住宅造りの研修等も行っていく予定です

現地からのストーリー「混乱の中の希望」

台風30号がレイテ島を直撃したその夜、タクロバンで新たな命が誕生しました。ローデス・ハミルダは、台風からの避難の混乱の中、夫と二人の子どもたちとはぐれてしまい、雨の降る暗闇の中、たった一人で産気づきました。病院にたどり着いたものの、台風の被害を受け、病院は閉まっていました。次に避難所となっていた教会に歩いていき、ローデスはその教会の玄関で元気な女の子を出産しました。赤ちゃんは、この台風のフィリピン名と同じヨランダと名付けられました。その後、ローデスは、夫と子どもたちとも再会できました。

崩壊した町では多数の死者が出ましたが、ヨランダは小さな希望の光となっています

終了事業

東日本大震災被災者支援事業　発災から３年。再び現地を訪れて。

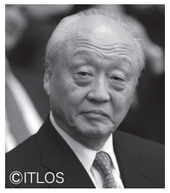
東日本大震災から３年が経とうとしています。当財団の支援事業は2012年12月に終了しましたが、以降定期的に現地を訪問しています。訪問の度に住民の方々の考えの変化に気づかされます。震災から２年経った2013年３月の時は、「少しずつだが落ち着いてきたので何とか前を向いてがんばっていくしかない」、「町から具体的な復興計画、町の再建や復興住宅に移ることができる時期等が示されればそれに向かって計画を立て進めるのに」という声が多く聞かれました。それから約1年が経った2014年1月の訪問では、「計画があっても1年が３年、３年が５年と遅れるので、なるようにしかならないと開きなおっている」、「パンパンに膨れた風船の状態。いつ破裂してもおかしくない」といった切迫した声が多くなっていました。

新しく家を建てる、または他地区へ移動する等、仮設住宅の空き部屋も目立ってきており、隣人が少しずついなくなっていくことに焦りを感じ、それがストレスになっているケースも多くあります。また地元の方々が運営する支援組織・団体も、助成金、補助金等が年々少なくなってきている現状に、今後活動が継続できるのかと不安を感じておられます。一方で、山積みであった瓦礫はほぼなくなり、かさ上げが徐々に始まり、町の景観も目に見えて変わってきていました。

今我々にできること。それは関心を持ち続けることではないでしょうか。現地の方々からは「私たちを忘れないでほしい」、「被災地に来て、話して、感じてほしい」という言葉を多く聞きました。

世間では復興、復興といわれていますが、復興はまだ終わっていません。本当の復興はこれからが正念場だと感じました。

（事業部　緊急支援コーディネーター　玉熊　諭）


©ITLOS

柳井俊二名誉会長による現地視察報告

2012年10月に名誉会長に就任した柳井俊二 国際海洋裁判所 所長（ドイツ ハンブルク在住）から手記が届きました。

正月休みで帰国し1月9、10の両日、武田事務局長、玉熊緊急支援コーディネーターの案内で、念願の岩手被災地視察が実現しました。宮古市内の復興に比べ、田老地区、山田町、大槌町に行くにつれて復興の遅れが目立ちました。特に大槌町は、瓦礫こそ片付いていても更地が多く地盤のかさ上げもこれからです。津波の被害が甚大だったことに加え、町長が亡くなり、町役場が壊滅して行政が停止したことも復興を一層困難にしているようです。田老地区の被災地支援団体「うましか」、山田町社会福祉協議会、山田町浜川目仮設団地、臼澤鹿子踊り保存会、ファミリーショップ・ヤハタ等を訪問し、地元の皆さんの話を聞きました。津波の本当の恐怖は、経験した人にしか分からないと感じました。家族、家、財産を失った皆さんが健気に頑張っているのに頭が下がるばかりです。インフラ、住居等の物理的な復興になお長期間を要しますが、心のケアにはもっと時間がかかると思いました。養殖いかだが浮ぶ海は、うそのように静かでした。

田老地区にて玉熊職員から説明を受ける柳井名誉会長

©Kei Sato

浜川目仮設住宅で活動を続ける「野の花の会」。昼食はそれぞれ持ち寄ったものを交換し合う。代々受け継いできた「田舎料理」は素材を生かした懐かしい味のするものが多い。交わされる会話の中には、長く続く仮設住宅暮らしの大変さの滲むものもあるが、こうやって話ができることが何よりの息抜きになるという。（山田町）

©Kei Sato

「やっぱり早く町が復興してほしいという想いはあります。この子たちにとって故郷となるこの場所が、何も無い殺風景なままだと可愛そうだなって」。今回の取材を通じ、耳をふさぎたくなるような悲惨な話も沢山聴いた。しかし、ここで出会ったこどもたちの瞳を見ていると、そこには未来が映っているように思え、暗い気持ちも洗われるようだった。簡単な道のりではない。それでも、人々は前へと進む。（山田町）

３年目 -痛みの先に

あまりにも終わりの見えない取材に息苦しさを感じていた。2011年３月11日。忘れることのできないあの日、東北の海は巨大な水の山脈となり沿岸各地の街々を呑み込んだ。甚大な被害を受けた被災地のひとつ、岩手県陸前高田市に住んでいた両親の安否を確認するために、僕は早々に荷物をまとめて飛行機へと飛び乗った。当時僕は、アフリカ大陸南部の国々で、資源を巡る紛争の取材を進めているところだった。想像を絶する光景がメディアを通じて世界中に配信された。降り立った日本は冷たく暗く、やっとのことで辿り着いた現地で再会したのは、生きる意志が削がれる程に意気消沈した父と、冷たくなった母の躯だった。目に映る光景全てを埋め尽くす瓦礫と、脳の深部を突くような腐臭を忘れることは生涯ないだろう。

あれから３年という月日が過ぎ、改めて震災と向き合う時間を頂いた。縁のあった陸前高田市へ通うことは続けていたものの、他の地域に赴くことは稀だった。とても、全てを把握することなどできないほど大規模な災害だったのだ。「復興」という言葉は、既にどこか擦り切れてしまったかのように響く。日本全土が東北に、被災地に、傷ついた人々へとエールを送った。３度の季節が巡った今、人々はどのように「復興」という言葉と向かい合っているのだろうか。

沿岸を車で駆ける。海沿いの国道は、時に清々しい朝日と、その輝きに揺れる海とに面した美しい道だ。しかし、その傍らに存在していたはずの街の姿は見えない。積み重なった瓦礫は撤去されたが、家々の基礎が剥きだしになった茶色い平野は、痛みよりも、何かが抜け落ちてしまったかのような虚無を感じさせた。

車を降り、歩いてみる。人々の目線に立ち、街跡を歩いてみる。ところどころ、再建した店に立ち寄ったり、仮設住宅で開催されているコミュニティカフェに伺ったり、そこにいる人々の声に耳を傾けた。「母の遺体と共に夜を過ごした」、「まるで山のような津波に現実感が希薄だった」。厳しい現実があるのは確かだが、そこは空っぽなだけの虚無の世界ではないとすぐに気づいた。必死に前へと進もうとする人、誰かの力になれないかと尽力する人、新しく育ちつつある命。震災後に子育てを始めたお母さんたちに話を聞いた。「この子たちの故郷となるこの街が、少しでも温かな街になってくれたらと思います」。

「復興」という、途方もなく大きな言葉の影に隠れてしまいそうなほどに小さな、小さなそれぞれの一歩だが、その一歩の積み重ねが、いつか未来へと繋がるのだろう。痛みから目を逸らすのではなく、その痛みゆえに、温かな未来を築いていく。人間には、そんな力があるのだと信じている。

（フォトジャーナリスト　佐藤　慧）

©Kei Sato

一体どれほどの破壊力を持った津波が到来したらこのような破壊の傷跡を残せるのだろうか。そんな恐怖におののいてしまうほどの無残な光景が、今もあちこちに残る。「想像を超えた津波だった」と人は言う。人間とは、そもそも自然からしてみたら本当にちっぽけではかないものではないのだろうか。（釜石市）

©Kei Sato

釜石望鈴（みすず）さんの大切な故郷、大槌町吉里吉里（きりきり）は、湾の正面に続く平地の街並みがごっそりと姿を消していた。震災当時中学生だった望鈴さんは、「後ろを振り返る余裕もなく必死に高台へと逃げた」という。（大槌町）

「第1回パートナーシップ・フォーラム」を開催しました

昨年12月7日（土）に、ファンドレイジング・ボランティアの皆さんと職員との意見交換会「第1回パートナーシップ・フォーラム」を開催。ボランティアの方々20名に加え、職員等18名が参加しました。

事業説明や質疑応答を通じて、当財団の事業の分かり辛さ、またボランティアの皆さんの関わり方等、問題点が色々と浮き彫りになりました。もっとCAREを知りたい、もっと関わりたい！そのようなボランティアの皆さんの熱い想いには、改めて感謝をお伝えしたいと思います。

そして今回、「継続支援者の拡大に向けた課題」についても、ワールドカフェ方式（注）でともに協議し解決策を導けたことは大きな成果であり、今後の戦略にもぜひ取り入れていきたいと思っております。今後も、支援者の皆様とは、顔の見える関係構築に努めていきたいと思っています。

（常務理事・事務局長　武田　勝彦）

今後も定期的にパートナーシップ・フォーラムを開催し、顔の見えるCAREを目指します

（注）本物のカフェのようにリラックスした雰囲気の中で、メンバーの組み合わせを変えながら、4～5人単位の小グループで話し合いを続ける対話法。あたかも参加者全員と話し合っているかのような効果が得られます。

「ファンドレイジング・ボランティア」の歩み

昨年10月のグローバルフェスタで、第5期は「ブラボーバナナ」（注）を使ったバナナキューを販売しました
（注）丸紅株式会社が手掛ける社会貢献型商品「富楽宝／ブラボー／ BRAVO」バナナ。売上の1%が、CAREの「I am POWERFUL基金」を通じ、アジアやアフリカの女性や子どもたちの支援活動に充てられています。

CARE+は、本年1月に初の主催イベントとなる料理教室を開催しました

2月1日（土）～2日（日）に開催された「ファンドレイジング日本2014」において、「ファンドレイザーはボランティア？」と題して、2011年から実施しているボランティアチームによるファンドレイジング（資金調達）の取り組みの事例を発表する機会をいただきました。

セッションには70名ほどが参加して下さり、本取り組みの始まりから現在に至るまでのプロセスと、その時々に直面した課題を紹介しました。同じような取り組みをすでに実施している、またはこれから始めようとしているNGO・NPO関係者、行政職員などの参加者が多く、「自団体の取り組みにも活かしていきたい」、「話を聞いて、自団体でも始めようと思った」という意見が多く寄せられました。当財団の事例が国際協力や日本における社会活動の裾野を広げる一助になったことを嬉しく思っています。同時に、当財団が直面している課題は他団体でも課題として認識されている事柄が多く、今後も情報交換を継続していくことになりました。

一方、当財団においては、第5期目のチームが活動を修了し、第1期からのファンドレイジング総額は882,994円、イベント開催による集客はのべ885人を超えました。6ヶ月の活動を修了したメンバーは「CARE＋（ケアプラス）」として、卒業生による緩やかなネットワークを築きながら、CAREの支援活動を続けています。そのCARE＋もメンバーが40名を超え、個々のメンバーのモチベーションやバックグラウンドをより効果的・有機的に活かす枠組みをつくりたいと考えています。2014年2月に当財団とCARE＋の協議を経て新生CARE＋の活動がスタートしました。

10名にも満たない職員で活動している当財団ですが、CARE＋やファンドレイジングチームなどボランティアや支援者の皆さまとともに、これまで以上に効果的な支援活動を展開・継続していきたいと思っています。

（マーケティング部　徳　恵利子）

Hello!
CARE International Japan
スタッフ紹介
STAFF

私がCAREに応募した理由は、CAREの考え方に共感したからです。問題の表層のみの解決や応急的な支援で終わらせるのではなく、貧困や不公正が生じてしまっている根本的な原因を理解した上で、その解決に取り組むというCAREの方針を知り、CAREで働きたいと思うようになりました。

私はCAREで勤務する以前から日本の国際協力NGOで働いていましたが、それには大学時代の経験が関係しています。大学で社会福祉を専攻し、障害者施設、国際協力・環境NGOでアルバイトやボランティアをしていました。そこでの活動を通じて、障害者や途上国の人たちと交流し、彼らの生活状況を知りました。そして彼らが抱える問題について、自分の実体験のような切実な問題として捉えるようになりました。そのため、大学卒業後は国際人道支援の仕事に就くことにしました。

現在、私が担当するのは、CAREアフガニスタンとの連携による、「遠隔農村地域のコミュニティ運営による初等教育事業」です。具体的な業務内容は、アフガンの子ども2,000人が無事に小学校に通学できているかの確認、そして現地職員との協議や連絡調整などです。アフガニスタン人でもある現地職員は、自国の社会復興で最も必要なのは、女の子と男の子全員が教育を受けることだと信じています。そのような信念が最初にあるので、彼らは、休日であっても勤務するほど、情熱的に業務に打ち込んでいます。私も、このようなスタッフと一緒に仕事ができ、またアフガニスタンの子どもたちが可愛らしい絵を描いて見せてくれるので、毎日の業務にやりがいを感じています。

今後の抱負は二つあります。一つは、活動報告会等を通じて、より多くの日本の皆さまにアフガニスタンの現状と教育の必要性をお伝えすることです。「知る」ことがなければ、次の具体的なアクションにつながらないと思いますので、まずは多くの方に「アフガニスタンでの教育の必要性」を知っていただくことに注力したいと思っています。もう一つは、一緒に仕事をしている若いアフガニスタン人スタッフが、より能力を高めて、自国の持続的な開発に貢献できるようになってもらいたいと思っています。そのために、彼らの能力（特に問題分析能力・外交能力）が高まるよう、OJT（実地訓練）を通じた助言指導をしていきたいと思います。

私スタイルのCAREライフ

ケア・フレンズ岡山
会長　中島　美子

ケア・フレンズ岡山は1992年岡山県下73名の女性によって設立されましたが、CAREについては未だ全く何の知識もなく、ボランティア活動に関しても何の経験もありませんでした。後で知ったことですが、ケア・フレンズ岡山のような組織はCAREの支援組織としては世界ではじめてのものだったそうです。設立の翌年の9月に橋田寿賀子さんを講師としてお迎えして第1回の講演会を開催し、続いて10月に第1回のチャリティバザーを行い、この講演会とバザーは現在に至る迄継続して行っています。こうして一生懸命CARE事業の支援を行っていますが、対象となっている地域が実際にはどのような状態なのかは、ただ日本の昔話や自分の身の廻りの事柄から想像するほかなく、私達の援助がそこでどのような効果すなわち生活の変化をもたらしているのか知りたいと思います。

〈武田事務局長よりのコメント〉
理解しにくい点がありながらも、長きに亘るご協力に深く感謝申し上げます。まだまだ我々の説明努力が足りないと認識しております。これまで以上に、現場の様子や効果を誰にでもわかるよう伝える工夫を重ねて参りますので、引き続きのご協力をどうぞよろしくお願いいたします。

CAREストーリー

シリアで内戦が始まってから３年を迎えようとしています。これまで、110,000人の命が犠牲となり、900万人が国外退去したといわれています。レバノン政府によると、その内の120万人が同国で暮らしています。

マウント・レバノン地区も多くのシリア難民が暮らす場所の一つですが、そこの小学校では現在授業は行われておらず、その代わりに150人以上のシリア難民を受け入れる避難所となっています。

教室で家族とともに暮らす少女は、「ここで勉強できたらどんなにいいか」といいます。この教室で16名の親族とともに生活しています。教室はとても暗く、寒く、少女たちシリア難民はかろうじて持ち出せた衣類を学校の地下で洗濯し干していますが、地下室も寒く湿っているので衣類が乾くのに数日かかるといいます。

学校の運動場は、子どもたちが遊べる唯一の場となっています。校長室に住む男性難民は、「ここは凍りつくほど寒いです。夜はみんなひっついて温め合って寝ています。何もかも失い、残ったものはお互いです」と言います。

シリア難民の子どもたちのほとんどがこの３年間学校に通えていません

CAREはこのような学校に住むシリア難民に対して、毛布とカーペット、そしてストーブと燃料を買うための現金支給等を行っています。

事務局からの報告

「あつめて国際協力」へのご協力ありがとうございました

開始より１年半。これまで、合計54件（194,507円相当）のご寄付をいただきました。皆さまのご協力に対し心よりお礼申し上げます。支援者のお一人から、このようなお言葉をいただきました。「手紙を出す機会も減ってきて、古切手も、なかなか集まらなくなってきた今日この頃です。でも、少しずつでも集めて、これからも送り続けます。待っていて下さい！」

ぜひ皆様も、お手元にある、書き損じはがき（年賀状）などを、当財団までお送りください。当財団が支援に換えて、途上国の女性や子どもたちに届けます。引き続き、「あつめて国際協力」へのご協力お願いします。

捨てないで、あつめて、おくるだけ。それだけで途上国への支援になります

はがき22枚でアフガニスタンの女の子が小学校に1年間通うことができます

個人支援者専用ダイヤル TEL: 03-5944-9931

公益財団法人　ケア・インターナショナル ジャパン
〒171-0031 東京都豊島区目白2-2-1 目白カルチャービル5階　TEL : 03-5950-1335　FAX : 03-5950-1375　E-mail : info@careintjp.org
Website: www.careintjp.org　Facebook: www.facebook.com/CAREjp　Twitter: https://twitter.com.CAREjp

※ 小誌へのご意見、ご感想を募集しています。発行元までお寄せください。
※ このニュースレターのデザイン・レイアウトは、CAREのデザインボランティアの沼尻初恵様のご協力により、制作されています。

ケア・インターナショナル ジャパン　ニュースレター　CARE World Vol.26
2014年2月28日発行（季刊）発行人：五月女　英介　編集：甲斐　博子